

復活節第四主日

ヨハネ 10:11-18

2018. 4. 22

イエズス会司祭 小暮康久神父

本当にお久しぶりでございます。高円寺教会で、この復活節の季節に皆さんとまたご一緒にごミサを捧げることができることに、今、深い喜びを感じています。そして今日の福音には、この復活節にわたしたちに与えられた、とても大切なイエス様の思いがそこにあると思います。イエス様は今日、「わたしは良い羊飼いです。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」とおっしゃいます。

羊、あまりわたしたちの中ではそれほど見ることがないかもしれないですね。わたしは去年の9月からこの3月末までフィリピンに研修、というか、イエズス会の第三修練というのが、司祭叙階の後、さらに5年位働いて、最後の修練期というのがあって、その修練に行ってきたんですね。帰ってきたばかりです。とても暑かったんですけど、フィリピンも暑いので羊を見ることはないですね。羊というのはやはり少し寒い所で、あれだけ毛が生えるから、あそこでは可愛そうですね。だから、フィリピンにたくさんいる動物は水牛とかですね。牛も多分暑くて汗をいっぱいかくのでしょう。すごくやせてる牛が多いです。そういう意味で、このたとえ話はフィリピンではピンとこないかもしれないんですけど、わたしがオーストラリアで勉強しているときに、オーストラリアは皆さんご存知のようにずっと羊毛が盛んだったので、たくさん羊が放牧されている場所があるんですね。で、ある夏わたしは8日間の黙想をしているときに、黙想の家のすぐ近くは広大なワイナリー、ぶどう畑と牧草地だったんですね。黙想の途中で少し、黙想しながら、瞑想しながら、静かに散歩をしていると、羊の群れがいるわけです。わたしはふいに挨拶をしたくなって、羊に向かって「ハイ！」とか言ったんですね。そしたら、羊がビクッとして、そしてわーっと逃げたんです。わたしは全然脅かしてるつもりはないし、親しみを込めて声を掛けたんだけど、羊にとっては全く知らない、見たことのないような人が声を掛けてるということで、すぐビクッと反応して逃げたわけですね。つまり、羊というのは、とっても臆病な動物なんです。

人間と共にずっと過ごしてきた長い時間がありますから、野生の動物のような爪とか牙とか、自分を守るためのものがないんですね。おまけに、目も悪い、あんまり良くないんですね、そして、鼻も利かない、そして、極めつけが、方

向感覚があんまりないんです。ほんと野生では生きていけないような存在が、羊ですね。でも、その羊にたった一つだけ優れたところがあって、それは羊飼いの声を聞き分ける力ですね。だから、わたしのような変なおじさんが、知らない人が声をかけたら、ビクッと反応して、そしてすぐに逃げるわけですね。ほんとに羊飼いが来たときだけアッと気付いてその方に行く。それ以外の声には一切警戒して近寄らないということですね。「あっ、このことか」と、そのときわたしは今日の聖書の箇所が思い浮かんだんです。だからほんとに羊というのは羊飼いの声をほんとに良く知っている。そうでない声もよく知っている。そうでない声にすぐに気付く。そういう動物なんだなあ、と。

だから、今日イエス様がわたしたちに話されているのは、わたしたちもそのようにイエス様の声を聞き分ける力が与えられているんだということですね。だから、もしわたしたちがイエス様の声と全然違う者の声と自分の内側から出てくる声と、全部がごちゃごちゃになっていったら、多分迷ってしまったりするかもしれないですね。でも、その力はすでに与えられているっていうことを、今日福音の中でイエス様はわたしたちに示してくださっているわけですね。どこかと言うと、「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」。この言葉はわたしたちもよく聞いて知っています。そしてその次の言葉ですね。「それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである」。つまり、御父が御子であるイエス様をほんとに知っている。そして、御子であるイエス様が御父をよく知っている。その御父と御子の深い絆、間柄、それと同じだと言っているんですね、イエス様は。つまり、わたしたち羊は、イエス様とそういうふうに強くつながっている。そのような者として造られている、とイエス様ははっきりおっしゃっている。「同じである」。

つまり、わたしたちは信仰生活を歩んでいく中で、ときどき、あるいはもしかしたら多くかもしれません、なにか信仰に迷いを感じたり、あるいはほんとに信じることができないというふうに感じることもあるかもしれません。そんなときもあるかもしれません。でも、イエス様は今日はっきりと、「わたしは父を知っており、父がわたしを知っているのと同じように、わたしはあなたたちを知っていて、あなたもわたしを知ることができる」とはっきりおっしゃっています。つまり、わたしたちがイエス様に、神様に信頼を持って祈るとき、それは絶対的に保障されているということです。

わたしたちはそのようにイエス様とつながった存在だ。だから、今日の第二朗読で、「み子があらわれるとき、み子に似たものとなることを知っています。なぜなら、そのときみ子をありのままに見るからです」。わたしたちはそのよう

な者として造られている。神様はなにか教えの中に、あるいは神学の本の中に、あるいは神父さんの話の中で、という存在ではなくて、このわたしが顔と顔を合わせるように絆を育むことができる方だ、とイエス様はおっしゃっている。つまり、わたしたちは神様を体験できる。神体験は聖人だけの話じゃなくて、わたしたち一人ひとりに本来与えられている恵みですね。クリスチャンであるなら必ず神体験があるはず。それは神様の保障です。なぜなら、そのように造ったと神様がおっしゃっているから。

イエス様は言うんです。「わたしはわたしの羊を知っている。そして、羊もわたしを知っている」。そのようなイエス様、わたしたちはそのようにイエス様の声をほんとに聞き分けることができる耳をすでに頂いている。だけど、そのイエス様の声に耳をすます、というわたしの選びがそこで必要なのです。わたしがあの声もこの声もその声もその声も全部、というふうになっていたら、やっぱりどれがイエス様の声かわからなくなるわけですね。でも、本当にイエス様の声に耳をすますということを毎日の生活の中に少しずつでも育んでいくなれば、何かある思いが来たときに、「あっ、これはイエス様のものじゃない」、ある思いが来た時に、「あっ、これはイエス様の思いかもしれない。なぜなら、わたしの深いところに平安が広がっていったから」。そのようにして、わたしたちは、神様の語りかけ、イエス様の呼びかけを聞き分ける力を育むことができる。それはどこで？ 毎日の生活、今ここ、この生活の中で、その積み重ねの中で、ということだと思います。

羊も主人の声を、羊飼いの声を聞き分けるために、たぶん長い月日一緒に行動して、「あっ、これは主人の声だ」と多分学んで行くんですね。生まれたばかりの羊はまだきっとそれほどわからないかもしれない。でも、10日経ち、1ヶ月経ち、2ヶ月経ち、3ヶ月経つと「あっ、わたしの羊飼い、わたしの主人の声はこれ」というふうに分かる。わたしたちもそのように毎日の生活の中でそれを育んでいくこと、耳をすますこと、イエス様の声に耳を傾けることの積み重ねの中で、どこにイエス様の呼びかけがあるのか、どれがイエス様ではない声なのか、ということを知り分けることができるようになる。これを教会の用語では「識別」と言うんです。霊的な識別って言うんですけど、そういう賜物をすでにわたしたちはいただいているということですね。

そして、もう一つ、今日の福音の中で大切なメッセージは、イエス様は「わたしはこの囲いに入っていない他の羊もいる。その羊も導かなければならない。その羊もわたしの声を聞きわける」と。つまり、ミッションですね。高円寺教会はいつも宣教ってことに思いを育ててきていると思います。つまり、この教

会の外に、イエス様が呼びかけたい、そして、自分の声を届けたいと思っている羊がこの世界にたくさんいる、ということですね。そこに向けてわたしたちは、やっぱり外に向かってイエス様と一緒に福音を証していくというミッションがわたしたち一人ひとりにあるということです。なぜなら、それはイエス様の思いなんですね。「わたしはこの囲いに入っていない羊もいる、その羊も導きたい」とイエス様は言っている。わたしたち一人ひとりのクリスチャンはそのイエス様の思いを運んでいく喜びが同時に与えられている。それは、聖霊降臨祭に向けて復活節を歩んでいるわたしたち教会の姿でもありますね。聖霊降臨ってというのはミッションに向かって行く力、それが生まれた瞬間ですね。わたしたちキリスト者は本質的にミッション、そこに向けて招かれている。そこにわたしたちのほんとの深い喜びがある。わたしたちはミッションを生きる時、だれかと関わっていくとき、神様の愛を共に分かち合うとき、ほんとに生きている喜びが生まれる。わたしたち、自分一人で幸せになることは絶対に出来ないんです、人間は。わたしたちはむしろミッションにおいて本当の平安と喜びを体験する。イエス様はそれに招いている。

今日の福音はすごく大切な、わたしたちキリスト者にとって大切なことを、今日わたしたちにイエス様は語っておられると思います。